

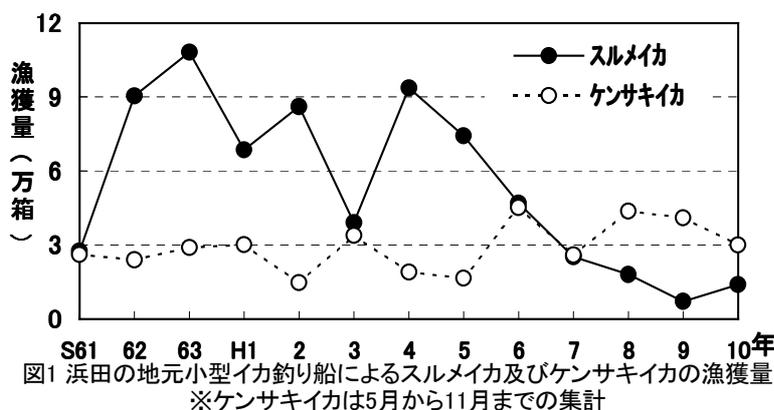
# トビウオ通信 (3月号)

(TEL 0855-22-1720)

## 《平成 10 年イカ釣り漁業の動向》

今月は、平成 10 年の島根県西部の沿岸域を主漁場とする小型イカ釣船の漁獲動向を振り返ります。

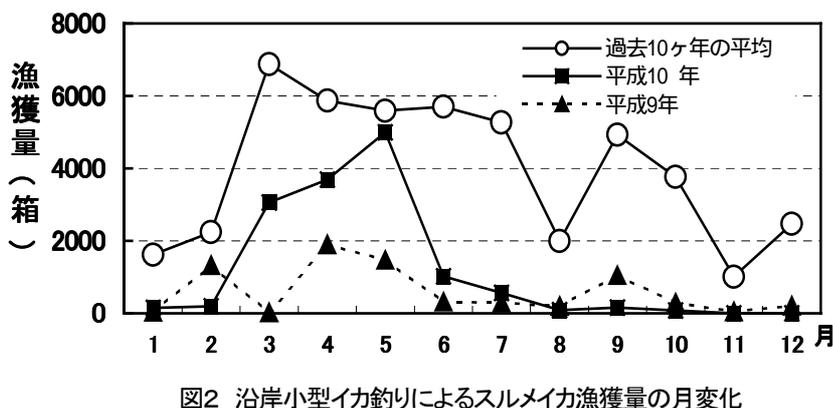
### スルメイカやや回復・ケンサキイカは平年並み



平成 10 年の島根県西部海域沿岸の小型船によるイカ類の漁獲量は、スルメイカが 13,969 箱、ケンサキイカが 30,038 箱でした。スルメイカは前年の 196%、平年の 25% で、不調だった昨年を大幅に上回ったものの、依然、低い漁獲量となっています。

一方、ケンサキイカは前年の 73%、平年の 101% で、好調だった昨年を下回りましたが、平年並みの漁獲量となりました(図 1)。

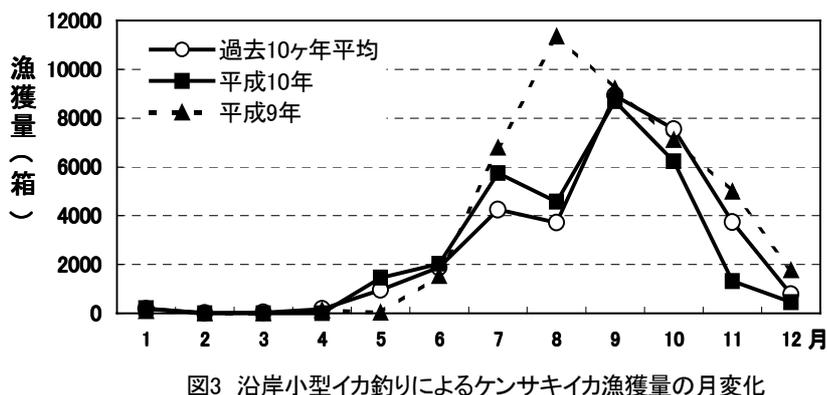
### スルメイカ春漁回復の兆し! ?



春から夏にかけては前年の夏に発生したと考えられる、いわゆる夏生まれ群を主対象とし(春漁)、夏から秋にかけては前年の秋に発生したと考えられる、いわゆる秋生まれ群を主対象としています(秋漁)。月別漁獲量を見ると、不調だった平成 9 年は春漁、秋漁ともに漁獲量は少なかつたのに対し、平成 10 年は秋

漁は依然として不調ですが、春漁は回復の兆しを見せています(図 2)。

一方、ケンサキイカの月別漁獲量を見ると、平成 10 年はほぼ平年通りの漁獲パターンでしたが、11 月に漁獲が落ち込み、終了期が若干早まった模様です(図 3)。



## 日本海のスルメイカ資源は低調

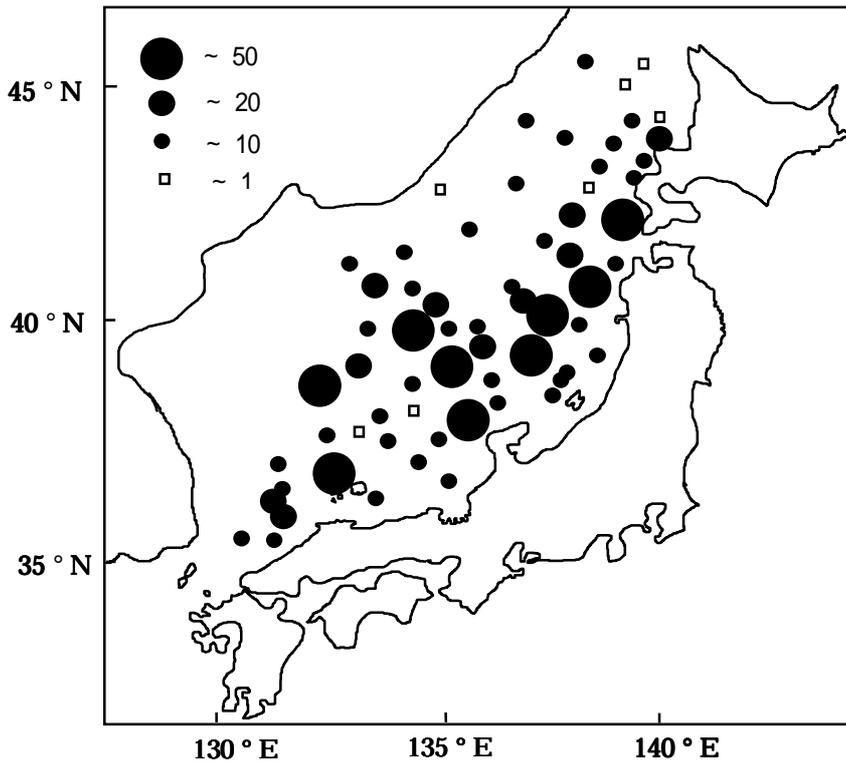


図4 平成10年スルメイカ漁場一斉調査によるCPUE (釣り機1台1時間当りの漁獲尾数)の分布

平成10年6月下旬から7月上旬にかけて日本海沿岸の水産研究所、水産試験場等が共同でスルメイカの漁場一斉調査を実施しました。漁場一斉調査は資源的に最も大きい秋生まれ群を対象としており、日本海での夏から秋にかけてのスルメイカ漁を予測する上で非常に重要な調査です。図4に調査地点別のCPUE(釣り機1台1時間当りの漁獲尾数)の分布を示します。

分布の密度を示すCPUEは日本海全体で一様に高い傾向が見られました。全海域のCPUEの平均値は8.6尾と、昨年(21.7尾)および1995年~1997年の平均(17.4尾)を大きく下回る値となっており、資源水準としては昨年の半分程度と推察されます。

## 稚子調査結果

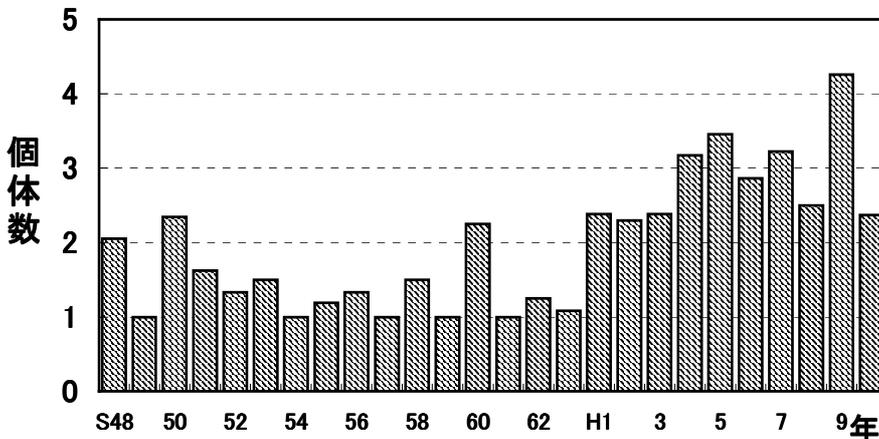


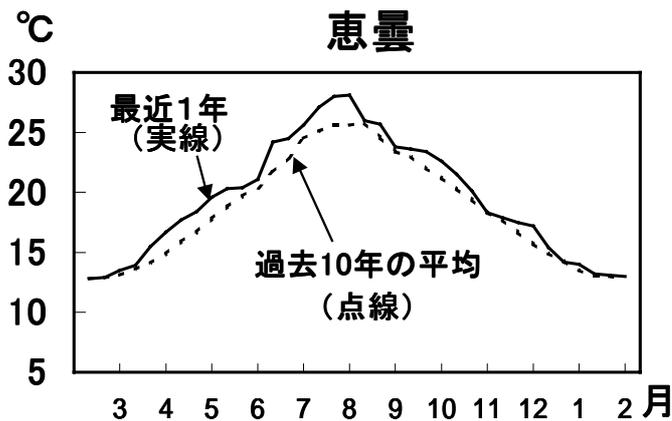
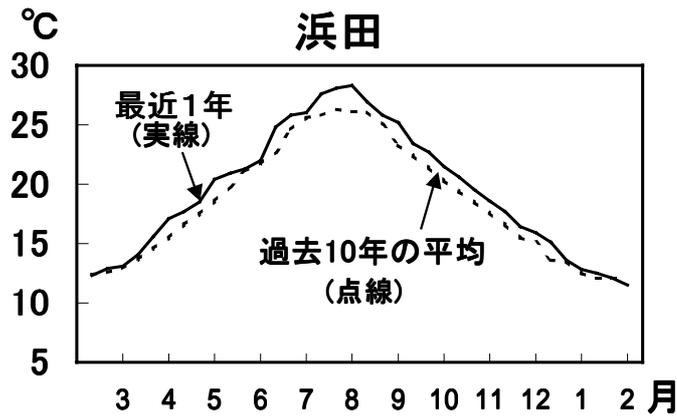
図5 スルメイカ稚子出現点あたりの採集個体数

昨年の10月6~23日にかけて日本海区水産研究所が実施したスルメイカ稚子分布調査によると、調査地点当りの稚子の出現個体数は2.4で、前年(4.3)を大きく下回り、漁場一斉調査の結果をそのまま反映した結果となりました。しかし、資源の再生産に決定的な打撃を与えるような減少ではなく、環境条件などが整えば十分に回復できるレベルにあると考えられます(図5)。

## 今後の漁模様

図1に示すように山陰沿岸域におけるスルメイカの漁獲量は、日本海全体での資源変動と相反するように、平成5年以降減少傾向にあります。これは秋生まれ群の南下回遊経路が山陰沿岸域に形成されなくなったため、漁獲の主体が夏生まれ群を対象とした春漁のみになったためと考えられます。したがって、今後秋生まれ群が山陰沿岸域に回遊してくるようになれば、スルメイカの漁獲量は回復することが期待されます。また、ケンサキイカは、このまま水温の高い傾向が続けば、昨年並かそれを上回る漁獲が期待されます。

## 《2月の海況》



### 定地水温

2月	月平均	平年差	評価
浜田	12.0	+0.1	平年並み
恵曇	13.1	+0.2	平年並み

定地水温は、前月に比べ浜田で1.8、恵曇で1.4下がり、浜田、恵曇ともに、前月に引き続き「平年並み」となりました。

また、島根・山口・鳥取の各県水産試験場が行った海洋観測結果(2月下旬~3月上旬)によると、山口県沿岸域では平年に比べ「やや高め」~「かなり高め」の水温となっていました。

一方、島根県沖には隠岐諸島北北東90マイルおよび日御崎沖北西40マイルに冷水域が発達し、その周辺海域では平年より「低め」のところも見られますが、島根県から鳥取県の沿岸から沖合にかけては、全般的に、平年より「やや高め」の水温となっています。

## 《 2月の漁況 》

### 【中型まき網漁業】

浜田港の中型まき網の総漁獲量は3,282トンで、前年の347%、平年の54%と平年の半分ほどですが、前年を大きく上回りました。水揚金額は、カタクチイワシの好調により前年の192%と好調に推移しました。漁獲の主体はカタクチイワシでした。また、恵曇でもカタクチイワシを主体に1,240トンの漁獲があり、前年の280%と好調に推移しました。浦郷でもカタクチイワシ主体に3,875トンの漁獲があり、前年の95%と前年並みに推移しました。

### 【イカ釣り漁業】

浜田の地元小型イカ釣り船によるスルメイカ・ケンサキイカの漁獲箱数は0箱で、全く漁獲がありませんでした。これは、荒天と漁獲不振のため、出漁を見合わせたためと思われます。ただし、浜田市漁協以外の小型イカ釣り船では、スルメイカを中心に39,910箱の漁獲があり前年の175%と好調に推移しました。一方、西郷港における沿岸の小型イカ釣りによる漁獲量は、スルメイカを中心に約34トンの漁獲がありました。

### 【沖合底びき網漁業】

浜田港の総漁獲量は350トン、水揚金額は1億5,700万円でした。また1統当たり漁獲量は58.3トン、水揚金額は2,620万円で、量・金額とも平年を10%上回りました。魚種別で見ると、キダイ、ケンサキイカ、ニギスは好調に推移し、平年の4.5~2.4倍の水揚げがありました。盛漁期を迎えたソウハチの1統当たり漁獲量は14tで、平年の1.8倍とまとまった漁が見られました。

恵曇港の総漁獲量は140トン、水揚金額は8,670万円で、量・金額とも平年を7%下回りました。盛漁期を迎えたアカガレイの漁獲量は71.4tで全体の半分を占めましたが、前年をわずかに下回りました。

### 【小型底びき網漁業】

和江漁協における1航海当たり漁獲量(601kg)・水揚金額(27.5万円)は前年を15%上回りました。ソウハチ、ニギス、アンコウはまとまった漁がありましたが、メイタガレイ、ヒラメは前年の50%に留まっています。

大田市漁協における1航海当たり漁獲量(649kg)は前年をわずかに下回りましたが、水揚金額(30万円)は前年を8%上回りました。前月と同様、ソウハチ、ニギス主体の漁で、全体の60%を占めています。

### 【定置網漁業】

県西部と東部では前月同様低調な漁況が続いており、浜田では漁獲量、水揚金額とも平成3年以降最低の水準となっています。漁獲の主体は西部はヤリイカ、東部ではマアジ・カタクチで、期待されたブリの水揚げは皆無に近い状態です。一方、隠岐地区ではスルメイカの漁獲量が急増し、漁獲量、水揚金額とも先月の6倍以上、前年同月と比較しても3倍と極めて好調な漁模様でした。

### 【釣・縄】

沿岸の釣は時化が多く出漁日数は減りましたが、前月に引き続きブリ類(ヒラマサ・ブリ)が好調で、漁獲量・金額ともにほぼ前年並みとなっています。浜田はアマダイ、ブリ類、ヤリイカ主体の漁で漁獲量10ト、水揚げ金額1,200万円でした。五十猛はカサゴ類、アマダイ、ブリ類が主体で、漁獲量は3.2ト、水揚げ金額は350万円となっています。

### 漁獲統計

平成 11年2月1日~28日

漁業種類	水揚港	延隻数 ・統数	主要魚種	1隻(統)1航 海当漁獲量	総漁獲量
中型まき網	浜田	45	カタクチイワシ	73ト	3,282ト
	恵曇	33	カタクチイワシ	38ト	1,240ト
	浦郷	63	カタクチイワシ	62ト	3,875ト
イカ釣り	浜田(沖合)	254	スルメイカ	180箱	39,910箱
	浜田(沿岸)	0	スルメイカ	0箱	0箱
	西郷	45	スルメイカ	169kg	7.6ト
沖底	浜田	26	ソウハチ・ケヅク	13.5ト	350ト
	恵曇	31	アカガレイ	4.5ト	139.9ト
小底	和江	385	ソウハチ	601kg	231ト
	大田市	210	ソウハチ・ニギス	649kg	136ト
定置網	浜田	19	ヤリイカ・カタクチ・マアジ	153kg	2.9ト
	恵曇	10	マアジ・カタクチ・スルメイカ	326kg	3.3ト
	浦郷	22	スルメイカ・マアジ	4,958kg	109ト
釣・縄	浜田	703	アマダイ・ブリ類・ヤリイカ	14kg	10ト
	五十猛	226	カサゴ類・アマダイ・ブリ類	14kg	3.2ト

1隻(統)1航海当漁獲量は総漁獲量/延隻数・統数で算出しており四捨五入した値です。